

るのほな

千葉大学医学部同窓会報 第50号

編集兼発行者

千葉大学医学部

るのほな同窓会報編集部

千葉市亥鼻町313

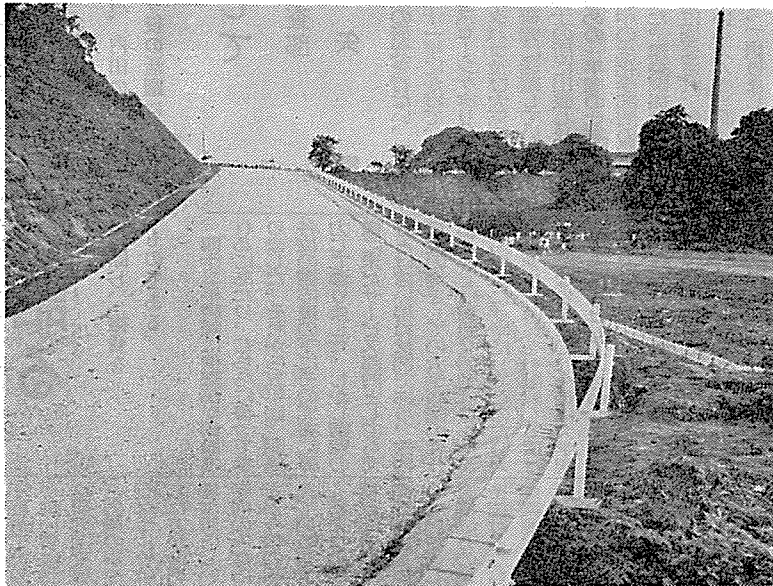
千葉大学医学部記念講堂内

新病院基幹工事はじまる

長年の懸案であった新病院建設も昭和四十六年度概算要求の通過によって、いよいよ現実の問題となり、二転三転した設計もほぼ最終決定をみる段階となった。

前号で紹介した設計のうち、今回変更された主眼点は本館の他に別棟を設けることで、角柱型の本館は地下二階、地上十二階となつて以前の設計より低くなり、本館の東側に母子センターとして三階建の別棟と精神科として二階建の別棟を設けることである。

ところで病院建設着手にさきだつて昨年度末には基幹工事が行なわれ、かつての野球場のスコアボード付近から亀井町方面に向かって新たな工事専用道路が完成された。



野球場の外野の堀の改修がすみ、連絡道路から見るとその緑が印象的である。その上にあたらしい基幹道路のガードレールが白い。削られた山肌には芝が植えられた。



サッカー場の東側にできた基幹道路。この先は野球場の外野の堀の上につづいている。左側は松林であった。春にはひそかにスミレの花が咲き、秋はススキの豊かであった小径が今や新病院建設の大動脈になろうとしている。

新任教授抱負を語る

このたび降矢、石川、内田の三氏教授就任に際し、抱負を述べていただいた。今後の活躍に期待したいものである。

教授昇任に際して

附属病院検査部

降矢 震



このたび千葉大学教授、検査部長の辞令を頂くことになりました。新病院の建設をひかえ、改めてその重い責任を痛感して居ります。会員の皆様にも以前同様温かい御応援下さいませ。御願ひ申し上げます。

昭和二十二年、本学卒業後、医学（現在の生化学）教室に入りました。最初与えられたテーマは、蛋白酵素の特殊性に関するものでした。その後、諸種水解酵素に関する特殊性と動力学に関する仕事を主として発生基質を用いて行なってきました。そのほかアミノ酸代謝に関する酵素、血清中酵素及び諸物質の微量測定に関する研究に従事してきました。その間、三十四年には大阪大学蛋白質研究所の須田研究室に第一回の交換研究員として出張、リシン代

衛生学教室を担うことになったこと

本学の卒業生として、伝統ある衛生学教室を担うことになったこと



衛生学教授就任に際して

石川 清文

とに、心から喜びを感じるとともに、その責任の重大さを自覚しています。そのために皆様の御期待にこたえ得るよう、またその時代の要請に即して要求されるものに応じ得るような体制作りをするべく最大の努力を続ける覚悟

であります。環境衛生学、労働衛生学を歩んで来た者として、環境とは何か、また人間と環境との相互関係を如何に理解するか、即ち人間生活における衣食住業病と如何に取組んで行くかということが、私の主題であろうと考えています。その中で衛生学を専攻する医者としての義務を果すべきだと思ひます。人生問題を離れ得ないのは人の負わされた本能的な義務

であります。環境衛生学、労働衛生学を歩んで来た者として、環境とは何か、また人間と環境との相互関係を如何に理解するか、即ち人間生活における衣食住業病と如何に取組んで行くかということが、私の主題であろうと考えています。その中で衛生学を専攻する医者としての義務を果すべきだと思ひます。人生問題を離れ得ないのは人の負わされた本能的な義務

であります。環境衛生学、労働衛生学を歩んで来た者として、環境とは何か、また人間と環境との相互関係を如何に理解するか、即ち人間生活における衣食住業病と如何に取組んで行くかということが、私の主題であろうと考えています。その中で衛生学を専攻する医者としての義務を果すべきだと思ひます。人生問題を離れ得ないのは人の負わされた本能的な義務

であります。環境衛生学、労働衛生学を歩んで来た者として、環境とは何か、また人間と環境との相互関係を如何に理解するか、即ち人間生活における衣食住業病と如何に取組んで行くかということが、私の主題であろうと考えています。その中で衛生学を専攻する医者としての義務を果すべきだと思ひます。人生問題を離れ得ないのは人の負わされた本能的な義務

謝辞の研究を行ない、三十九年から四十二年にかけて、ニューヨークのスローネンケタリング癌研究所で、タバコ及び大気汚染による発癌の研究に活躍しているウィンダー博士の所に出張しました。この始めの一年間の仕事は新らしく建設中の生化学部門の設置でありました。建築関係者の解りにくい英語に悩まされ、専ら研究に従事している人々を当時ほうらやましく思つて居りましたが、現在新病院の、また多くの他病院の検査室の設計をする際に大変役に立つて居ります。

四十二年病院に検査部が創設されるにあたり、こちらに移つて参りました。それから五年間、関係各位の御応援の下にその充実を努力して参りました。しかし御覽の様に未だサーブ部門としても充分とは言ひ得ぬ状況であり、教育研究の場としての大学病院の検査部としては満足な活動はなし得ませんでした。幸にしてこのたび大学院学生、医員も配置して頂けたことになり、今後は大学院病の検査部としてさうわしい内容にすべく努力して参ります。

検査項目の増大と使用機器の高量化は、必然的にその中央化を要しますが、これは単に臨床検査のみならず、研究の分野でも同様の事が言えます。人間の血糖でも大の血糖でも、全く同じ方法、同じ機器で行なえる以上、別々に

行なう事は人的にも物的にも全く不経済であり、まとめて行なう方がよい事は当然であります。逆に或研究室、専ら行なつて居る仕事と同様の事を僅かばかり検査部で行なうのは、その研究室に依頼した方が合理的であります。この様な新しい集中と分散の体系を学内のみならず学外にも広げることが今後の私共の役割の一つと考えて居ります。

私自身の問題と致しましては、検査部の運営のさまたげとならぬ範囲内に於いて、基礎教室で行なつて居りました。血清中の酵素、有機成分の微量測定に関する研究を続けるつもりで居ります。特に酵素測定に関する発色基質の開発は、世界でもその専門家は数少く、日本では千葉大学化学教室がその伝統的な唯一の場であるからであります。

昇任にあたりまして、自己紹介と、今後の方針の一端を述べさせていただきます。会員皆様のご健勝とご発展をお祈りしつゝ、右御挨拶申し上げる次第であります（本学昭和二十二年卒）。

昭和二十八年八月、荒廃のなかに太平洋戦争敗戦を迎え、当時海軍兵学校の生徒であった私は故郷の群馬県安中市に帰った。生家は養蚕農家で、病弱の父を看病しながら農業に従事した。重労働、粗食、大食の農民の宿命や矛盾を痛感し、数人の篤農青年とともに増殖会というサークルを結成した。このサークル活動は、医学生になつても継続し、前農山村医研教授（群馬大学衛生学教室）の門下を脱く動機となった。予防医学、特に農民の健康保持・増進への志向が当時既に定まった。昭和二十

六年群馬大学医学部的前身、前橋医専卒業、翌二十七年同大公共衛生学教室柳沢教授に助手として入り、二十九年教授の任に就任した。当時わが国農村には甚だ高率に鈎虫や回虫が蔓延していた。健康問題とくに食血の調査研究を進めている。そのほか農夫症、農薬中毒、ハウス病などの調査研究を行なっている。いずれも臨床医家との密接な連携が必要である。今後は、静岡・長野のみでなく広大な農・漁村を有する千葉県においても、交錯する社会環境と健康との関連について調査研究したいと思つて居る。また、教育の一環として学生の農村衛生実習も必要であらう。さらには千葉農山村医学研究会懇話会の結成を進め、そのお世話をしたいと考えて居る。先輩各位のご指導、ご鞭撻を切にお願いする次第です。

昭和十九年十月、千葉医科大学入學。昭和二十二年九月、同校卒業。昭和二十五年十二月、国立公衆衛生院労働衛生学部勤務。昭和三十三年二月、同部作業能率室長。昭和三十三年八月、医学博士の学位（東京大学）授与。昭和四十二年四月、昭和大学医学部教授（医学部公衆衛生学講座担当）。昭和四十六年十二月、千葉大学医学部教授（医学部衛生学講座担当）。

農山村医研教授に就任して

内田 昭夫



昭和二十八年八月、荒廃のなかに太平洋戦争敗戦を迎え、当時海軍兵学校の生徒であった私は故郷の群馬県安中市に帰った。生家は養蚕農家で、病弱の父を看病しながら農業に従事した。重労働、粗食、大食の農民の宿命や矛盾を痛感し、数人の篤農青年とともに増殖会というサークルを結成した。このサークル活動は、医学生になつても継続し、前農山村医研教授（群馬大学衛生学教室）の門下を脱く動機となった。予防医学、特に農民の健康保持・増進への志向が当時既に定まった。昭和二十

六年群馬大学医学部的前身、前橋医専卒業、翌二十七年同大公共衛生学教室柳沢教授に助手として入り、二十九年教授の任に就任した。当時わが国農村には甚だ高率に鈎虫や回虫が蔓延していた。健康問題とくに食血の調査研究を進めている。そのほか農夫症、農薬中毒、ハウス病などの調査研究を行なっている。いずれも臨床医家との密接な連携が必要である。今後は、静岡・長野のみでなく広大な農・漁村を有する千葉県においても、交錯する社会環境と健康との関連について調査研究したいと思つて居る。また、教育の一環として学生の農村衛生実習も必要であらう。さらには千葉農山村医学研究会懇話会の結成を進め、そのお世話をしたいと考えて居る。先輩各位のご指導、ご鞭撻を切にお願いする次第です。

昭和十九年十月、千葉医科大学入學。昭和二十二年九月、同校卒業。昭和二十五年十二月、国立公衆衛生院労働衛生学部勤務。昭和三十三年二月、同部作業能率室長。昭和三十三年八月、医学博士の学位（東京大学）授与。昭和四十二年四月、昭和大学医学部教授（医学部公衆衛生学講座担当）。昭和四十六年十二月、千葉大学医学部教授（医学部衛生学講座担当）。

昭和十九年十月、千葉医科大学入學。昭和二十二年九月、同校卒業。昭和二十五年十二月、国立公衆衛生院労働衛生学部勤務。昭和三十三年二月、同部作業能率室長。昭和三十三年八月、医学博士の学位（東京大学）授与。昭和四十二年四月、昭和大学医学部教授（医学部公衆衛生学講座担当）。昭和四十六年十二月、千葉大学医学部教授（医学部衛生学講座担当）。

昭和十九年十月、千葉医科大学入學。昭和二十二年九月、同校卒業。昭和二十五年十二月、国立公衆衛生院労働衛生学部勤務。昭和三十三年二月、同部作業能率室長。昭和三十三年八月、医学博士の学位（東京大学）授与。昭和四十二年四月、昭和大学医学部教授（医学部公衆衛生学講座担当）。昭和四十六年十二月、千葉大学医学部教授（医学部衛生学講座担当）。

昭和十九年十月、千葉医科大学入學。昭和二十二年九月、同校卒業。昭和二十五年十二月、国立公衆衛生院労働衛生学部勤務。昭和三十三年二月、同部作業能率室長。昭和三十三年八月、医学博士の学位（東京大学）授与。昭和四十二年四月、昭和大学医学部教授（医学部公衆衛生学講座担当）。昭和四十六年十二月、千葉大学医学部教授（医学部衛生学講座担当）。

学 術 会 議

『九期会員に当選して』

北 村 武



せつこを予想しております。

今回第九期の学術会議の選挙に際しましては物心両面のご援助を賜り、幸い、当選させて頂きました。厚くお礼申しあげます。

去る二月二十日から三日間第六十回総会が開かれ、役員と各種委員の人事が定められました。会長には越智会員(公)副会長には野村会員(一)と伏見会員(四)が選ばれました。七部の部長には高原会員(岡)教授、副部長には山形会員(東北)教授、幹事には医学関係から木村会員(久留米)教授、薬学関係からは宮木会員(本学)教授が選ばれました。七部の会員は二期目の会員が最も多く、大部分が新会員であり、それを国民生活に反映させ、即座に代表者を選定することによってお

る任務と断せざるを得ません。前段の件は免れ角後段の点は学者の責任でないというふうな見解がとられておりましたが、今期には医療について議論すべきであつと痛感しております。

四月には第六十一回総会が開かれ、実質上九期のスタートを切ることにあります。それまでに九期に必要な大綱を定めます。幸か不幸か、各種委員会を設ける委員に選ばれました。微力ながら、今期におきましては、さきのべた理由によって、医療のあり方について根本的に検討するような委員会をつくりたいと思っております。

新会長に嶋田宗之氏選出さる

東京るのはな会昭和四十六年度定期総会

昭和四十六年度東京のはな会 康保険院にとっては、世紀の大事業である健康法の抜本改正をめざす保険医総辞退の暗雲低迷し、又会議に立候補された北村教授を始め、参議員の選挙の前日という複雑なめとし、井出教授、新任の奥田、

開会先だち、久保田総務理事より、昨年から現在迄の物故会員即ち長町穆先生(日本橋)明治四十年卒、四十五年七月二十四日歿、生沼金次先生(太田区)昭和八年卒、四十五年十月三十日歿、石井宗吉先生(足立区)明治四十四年卒、昭和四十六年三月二十三日歿、昭和三十九年卒、昭和四十六年五月二十九日歿、中島静夫先生(杉並区)大正七年卒、昭和四十六年六月十七日歿、等五先生御逝去の報告があり、一同謹んで黙祷を捧げ、各先生の御冥福を御祈り申し上げた。中でも中島先生は、現に監事として活躍中であられたが、校医として中学生と二階に裏廊下の方へ行かれ不慮の死をとげられた、今迄ののはな会に対する情熱は、非常なもので、如何なる会でも殆んど欠かざる出席され、その態度種々のアドバイスをされた事に対して深く感謝の意を表し、重ねて哀悼の意を表するものであります。

久保田総務理事から、次のような報告があった。①理事會を三回開いた。第一回目の会では本部の理事十名、評議員十名の選出依頼があったので協賛の上、夫々十名ずつ推薦した。②臨時懇話会について昨年の行事の中で重要なのは、十月二十日に大塚病院で、松本胖教授をお招きして、臨床懇話会を開催した。松本教授は、今の健康は、病気を対症にしていることが、そもそも間違っている、我々は常に、病気を治す人間を対症にしている、考へ又治療をしなければならぬ、現行健康に對してきびしい批判をされた。我々、臨床家として大いに益するところがあったように思い、松本教授に對し、この紙面をかりて、厚くお礼申し上げます。

二、会計報告
伊東会計理事から、東京のはな会四十五年度収支決算報告あり、會員一致で可決した。

次いで、久保田総務から、「会則一部変更について」の提案があった。すなわち、会則第十七条に「本会に功績のあったものに對して總會で、會長に選出され、兩米六會員に、推薦することが出来る」とあるところに、名譽會員の前に名譽會長及び名譽會員と、入れたいと述べられた。全員一致で可決された。依つて、大塚会

長は名譽會長として推挙された。次いで、本會議の重要な議事である會長選出に入る。議長に内田佐通先生が推され、議長席につき、副議長には永井義一先生が推され、席につく。内田議長は各會員に對し、會長の選出方法について問へば、選衡委員を出し決めるべしとの声あり、内田議長指名により選衡委員として、大塚俊雄先生、石村貞雄先生、黒部信夫先生、木村泰三先生、眞岡一夫先生、服部了司先生、河合正計先生の七氏を決め、直ちに別室で選衡委員會を開いた。その間井出教授から、北村教授を學術會議に推薦するお話しがあり、次いで、北村學術會議員候補から、立候補の演説があった。その後、消防庁の岡村正明先生から、救急車の出動状況について詳細な講演があった。

この間に、選衡委員會も終わりが発表された。會長に島田宗之先生、副會長に松村英先生、高知重隆先生、監事に小野藤三先生、後藤秀倫先生を夫々選出した。

これに對し内田議長から、會員の賛否を求め、全員一致で推薦決定となる。次いで、大塚會長自ら新役員を紹介した。その後、永井議長より、前大塚會長の六年の長きにわたる御功績に對し深く感謝の意を表する動議が出た。全員の拍手にわく、大塚前會長これに答えて、簡単に挨拶され、次ぎに、嶋田新會長の登壇を促し、挨拶を乞った。

嶋田新會長の就任に上る東京のはな会は心機一転、大いなる発展を期待するものであります。(前副會長 落合和雄氏) 追記、四十六年七月、落合先生より本原稿をいただいておりますが、編集部の都合で発行が大変に遅れてしまい、お迷惑をおかけいたしましたことをお詫言ひ申し上げます。

次いで、大塚會長より挨拶が行なわれた。大塚會長は、四十九年九月二十三日東京會館で行なわれた總會で、會長に選出され、兩米六會員に、推薦することが出来る」とあるところに、名譽會員の前に名譽會長及び名譽會員と、入れたいと述べられた。全員一致で可決された。依つて、大塚会

長は名譽會長として推挙された。次いで、本會議の重要な議事である會長選出に入る。議長に内田佐通先生が推され、議長席につき、副議長には永井義一先生が推され、席につく。内田議長は各會員に對し、會長の選出方法について問へば、選衡委員を出し決めるべしとの声あり、内田議長指名により選衡委員として、大塚俊雄先生、石村貞雄先生、黒部信夫先生、木村泰三先生、眞岡一夫先生、服部了司先生、河合正計先生の七氏を決め、直ちに別室で選衡委員會を開いた。その間井出教授から、北村教授を學術會議に推薦するお話しがあり、次いで、北村學術會議員候補から、立候補の演説があった。その後、消防庁の岡村正明先生から、救急車の出動状況について詳細な講演があった。

この間に、選衡委員會も終わりが発表された。會長に島田宗之先生、副會長に松村英先生、高知重隆先生、監事に小野藤三先生、後藤秀倫先生を夫々選出した。

これに對し内田議長から、會員の賛否を求め、全員一致で推薦決定となる。次いで、大塚會長自ら新役員を紹介した。その後、永井議長より、前大塚會長の六年の長きにわたる御功績に對し深く感謝の意を表する動議が出た。全員の拍手にわく、大塚前會長これに答えて、簡単に挨拶され、次ぎに、嶋田新會長の登壇を促し、挨拶を乞った。

嶋田新會長の就任に上る東京のはな会は心機一転、大いなる発展を期待するものであります。(前副會長 落合和雄氏) 追記、四十六年七月、落合先生より本原稿をいただいておりますが、編集部の都合で発行が大変に遅れてしまい、お迷惑をおかけいたしましたことをお詫言ひ申し上げます。

東京るの は な 会

昭和四十七年一月総会

新年を迎えて間もない一月二十一日、東京るの は な 会が銀座東急ホテルにおいて開かれた。本学からは相磯学長、松本医学部長、降矢教授、金子助教も出席し、盛會趣行なわれた。

東京るの は な 会は、昨年六月末に定期総会を開き、役員の交代がなされた。新役員は会長に嶋田宗之先生、副会長に松村爽先生、高知重隆先生、監事には小野慶三先生、後藤秀倫先生が選出された（その際の原稿が49号締め切までに編集部に届かず、掲載できなかったことをここでお詫び致します）。

会長の嶋田先生の挨拶の中で、北村教授の学術会議会員当選のお祝いとともに、医療保険法改正の速報が発表された。すなわち、その決定が当日なされたばかりである（その経緯については述べられなかった）。

現在の学内情勢一般についての説明と新たな医学部の設立についての諸問題が語られた。松本学部長からは、昨年から今年にかけての医学部内の消息についての報告がなされた。続いて降矢教授から教授昇任の挨拶があった。

大塚前会長の言葉で乾杯がなされ、新年の祝賀が進むうちに、学術会議に出席されていた北村教授も到着し、益々盛りのあつた。そして、当選に際して会員各位の

支援を感謝する旨のお礼の言葉があり、今後の抱負などが語られた。

今回の会合は、伊藤宏一幹事の努力により東急ホテルの良い場所であり、しかも極めて内容豊富な宴会となし得た上に、出席者も七十余名を数え、大変盛會であった。

全員大いに歓談されたが、その中で新設医学部についての話があった。さまざまな情報も明らかにされた中で、千葉県内にもすでにふたつの医科大学が計画されていることが注目された。それに關しては東京るの は な 会がかなりの情報を収集しているのに対して、おひき元の医学部内と案外と知て居るゆえであるが、これらは

中央に近いかららしく思われるという意見も出された。以上のようになことを考えると、今後のよき連絡が必要である（この事も二次会で語られた）。

（文責 編集委員会）

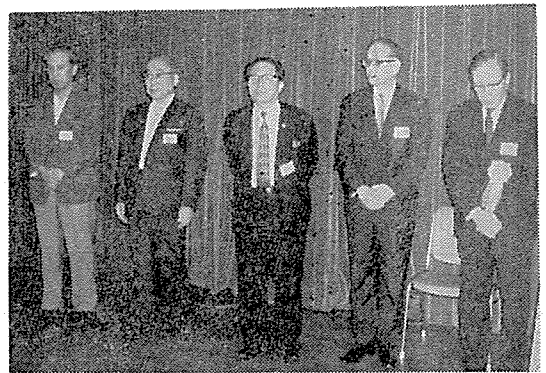
嶋田宗之新会長略歴



嶋田先生は、明治四十二年東京銀座に生れた生粋の江戸っ子である。府立五中を経て、第六高等学校に進み、同年卒業、卒業後直ちに、海軍軍医に任官、終戦まで勤務。この間岡山医科大学にて医

学博士授与、終戦後現住所（東京都豊島区池袋二の二二六番地）にて耳鼻咽喉科医院を開設現在に至る。その間医師会関係で大いに活躍され、豊島区医師会長を経て現在日本医師会代議員、日本医師会広報委員、東京都医師会代議員などの要職にあつてその辣腕を振

つておられる。なお、東京るの は な 会の新役員には写真の方々が決定した。



東京るの は な 会新役員

向って右より嶋田会長、松村副会長、高地副会長、小野監事、後藤監事

春の叙勲者

47・4・29

天長の日節にあたり、次の会員の方々が春の叙勲を受けられた。心からのお慶びを捧げたいと思います。

☆勲三等旭日中綬章

眞文三郎 昭和3年卒 福岡

☆勲五等双光旭日章

吉橋孝 大正6年卒 千葉

石上小平 大正13年卒 千葉

☆勲五等瑞宝章

影沢銀七 大正8年卒 栃木

伊藤理 大正9年卒 東京

〈随想〉

るの は な 同窓会館新設の夢

鍋谷欣市

私は昭和二十七年の卒業である。一萬五千元、工期には凡そ二年から今年で丁度二十周年を迎えたことになる。そんなに遠い昔のこととは思われないが、決して短かい年月でもない。その証拠に私の髪にも白いものが混って、しかもとみに増えつつある。それは遺伝であるとか、体質であるとか慰めてみても、結局は老化現象の一つであることに間違いない。

同窓会館が出来たのも、その私が紅顔の頃であった。とくに卒業式のと、るの は な 同窓会館に於て同窓歓迎祝賀会が催され、当時の会長の花岡和夫先生から饗應されたお声で祝辞を賜ったことを覚えている。また、今は「吉加賀谷凡秋先生が」

道迷う家毎の梅に行きあたりという卒業祝の短冊をいただいたのも、また新しい木の香りが残っている同窓会館の一室であった。当時の世相は戦争の余燼が随所にくすぶっていて、とくに物資欠乏の峻しい時代であったが、その頃の同窓会館は謡曲のおさらい会や囲碁、将棋の会なども催されて、かなりの繁利用されていたように思ふ。

ちなみに建設当時の資料を紹介させていたと、建坪は二四〇坪、経費総額は二五万円、坪価

は昭和二十七年の卒業である。一萬五千元、工期には凡そ二年から今年で丁度二十周年を迎えたことになる。そんなに遠い昔のこととは思われないが、決して短かい年月でもない。その証拠に私の髪にも白いものが混って、しかもとみに増えつつある。それは遺伝であるとか、体質であるとか慰めてみても、結局は老化現象の一つであることに間違いない。

同窓会館が出来たのも、その私が紅顔の頃であった。とくに卒業式のと、るの は な 同窓会館に於て同窓歓迎祝賀会が催され、当時の会長の花岡和夫先生から饗應されたお声で祝辞を賜ったことを覚えている。また、今は「吉加賀谷凡秋先生が」

道迷う家毎の梅に行きあたりという卒業祝の短冊をいただいたのも、また新しい木の香りが残っている同窓会館の一室であった。当時の世相は戦争の余燼が随所にくすぶっていて、とくに物資欠乏の峻しい時代であったが、その頃の同窓会館は謡曲のおさらい会や囲碁、将棋の会なども催されて、かなりの繁利用されていたように思ふ。

ちなみに建設当時の資料を紹介させていたと、建坪は二四〇坪、経費総額は二五万円、坪価

は昭和二十七年の卒業である。一萬五千元、工期には凡そ二年から今年で丁度二十周年を迎えたことになる。そんなに遠い昔のこととは思われないが、決して短かい年月でもない。その証拠に私の髪にも白いものが混って、しかもとみに増えつつある。それは遺伝であるとか、体質であるとか慰めてみても、結局は老化現象の一つであることに間違いない。

同窓会館が出来たのも、その私が紅顔の頃であった。とくに卒業式のと、るの は な 同窓会館に於て同窓歓迎祝賀会が催され、当時の会長の花岡和夫先生から饗應されたお声で祝辞を賜ったことを覚えている。また、今は「吉加賀谷凡秋先生が」

道迷う家毎の梅に行きあたりという卒業祝の短冊をいただいたのも、また新しい木の香りが残っている同窓会館の一室であった。当時の世相は戦争の余燼が随所にくすぶっていて、とくに物資欠乏の峻しい時代であったが、その頃の同窓会館は謡曲のおさらい会や囲碁、将棋の会なども催されて、かなりの繁利用されていたように思ふ。

ちなみに建設当時の資料を紹介させていたと、建坪は二四〇坪、経費総額は二五万円、坪価

は昭和二十七年の卒業である。一萬五千元、工期には凡そ二年から今年で丁度二十周年を迎えたことになる。そんなに遠い昔のこととは思われないが、決して短かい年月でもない。その証拠に私の髪にも白いものが混って、しかもとみに増えつつある。それは遺伝であるとか、体質であるとか慰めてみても、結局は老化現象の一つであることに間違いない。

同窓会館が出来たのも、その私が紅顔の頃であった。とくに卒業式のと、るの は な 同窓会館に於て同窓歓迎祝賀会が催され、当時の会長の花岡和夫先生から饗應されたお声で祝辞を賜ったことを覚えている。また、今は「吉加賀谷凡秋先生が」

道迷う家毎の梅に行きあたりという卒業祝の短冊をいただいたのも、また新しい木の香りが残っている同窓会館の一室であった。当時の世相は戦争の余燼が随所にくすぶっていて、とくに物資欠乏の峻しい時代であったが、その頃の同窓会館は謡曲のおさらい会や囲碁、将棋の会なども催されて、かなりの繁利用されていたように思ふ。

ちなみに建設当時の資料を紹介させていたと、建坪は二四〇坪、経費総額は二五万円、坪価

は昭和二十七年の卒業である。一萬五千元、工期には凡そ二年から今年で丁度二十周年を迎えたことになる。そんなに遠い昔のこととは思われないが、決して短かい年月でもない。その証拠に私の髪にも白いものが混って、しかもとみに増えつつある。それは遺伝であるとか、体質であるとか慰めてみても、結局は老化現象の一つであることに間違いない。

同窓会館が出来たのも、その私が紅顔の頃であった。とくに卒業式のと、るの は な 同窓会館に於て同窓歓迎祝賀会が催され、当時の会長の花岡和夫先生から饗應されたお声で祝辞を賜ったことを覚えている。また、今は「吉加賀谷凡秋先生が」

道迷う家毎の梅に行きあたりという卒業祝の短冊をいただいたのも、また新しい木の香りが残っている同窓会館の一室であった。当時の世相は戦争の余燼が随所にくすぶっていて、とくに物資欠乏の峻しい時代であったが、その頃の同窓会館は謡曲のおさらい会や囲碁、将棋の会なども催されて、かなりの繁利用されていたように思ふ。

ちなみに建設当時の資料を紹介させていたと、建坪は二四〇坪、経費総額は二五万円、坪価

は昭和二十七年の卒業である。一萬五千元、工期には凡そ二年から今年で丁度二十周年を迎えたことになる。そんなに遠い昔のこととは思われないが、決して短かい年月でもない。その証拠に私の髪にも白いものが混って、しかもとみに増えつつある。それは遺伝であるとか、体質であるとか慰めてみても、結局は老化現象の一つであることに間違いない。

同窓会館が出来たのも、その私が紅顔の頃であった。とくに卒業式のと、るの は な 同窓会館に於て同窓歓迎祝賀会が催され、当時の会長の花岡和夫先生から饗應されたお声で祝辞を賜ったことを覚えている。また、今は「吉加賀谷凡秋先生が」

道迷う家毎の梅に行きあたりという卒業祝の短冊をいただいたのも、また新しい木の香りが残っている同窓会館の一室であった。当時の世相は戦争の余燼が随所にくすぶっていて、とくに物資欠乏の峻しい時代であったが、その頃の同窓会館は謡曲のおさらい会や囲碁、将棋の会なども催されて、かなりの繁利用されていたように思ふ。

ちなみに建設当時の資料を紹介させていたと、建坪は二四〇坪、経費総額は二五万円、坪価

は昭和二十七年の卒業である。一萬五千元、工期には凡そ二年から今年で丁度二十周年を迎えたことになる。そんなに遠い昔のこととは思われないが、決して短かい年月でもない。その証拠に私の髪にも白いものが混って、しかもとみに増えつつある。それは遺伝であるとか、体質であるとか慰めてみても、結局は老化現象の一つであることに間違いない。

同窓会館が出来たのも、その私が紅顔の頃であった。とくに卒業式のと、るの は な 同窓会館に於て同窓歓迎祝賀会が催され、当時の会長の花岡和夫先生から饗應されたお声で祝辞を賜ったことを覚えている。また、今は「吉加賀谷凡秋先生が」

道迷う家毎の梅に行きあたりという卒業祝の短冊をいただいたのも、また新しい木の香りが残っている同窓会館の一室であった。当時の世相は戦争の余燼が随所にくすぶっていて、とくに物資欠乏の峻しい時代であったが、その頃の同窓会館は謡曲のおさらい会や囲碁、将棋の会なども催されて、かなりの繁利用されていたように思ふ。

ちなみに建設当時の資料を紹介させていたと、建坪は二四〇坪、経費総額は二五万円、坪価

は昭和二十七年の卒業である。一萬五千元、工期には凡そ二年から今年で丁度二十周年を迎えたことになる。そんなに遠い昔のこととは思われないが、決して短かい年月でもない。その証拠に私の髪にも白いものが混って、しかもとみに増えつつある。それは遺伝であるとか、体質であるとか慰めてみても、結局は老化現象の一つであることに間違いない。

同窓会館が出来たのも、その私が紅顔の頃であった。とくに卒業式のと、るの は な 同窓会館に於て同窓歓迎祝賀会が催され、当時の会長の花岡和夫先生から饗應されたお声で祝辞を賜ったことを覚えている。また、今は「吉加賀谷凡秋先生が」

道迷う家毎の梅に行きあたりという卒業祝の短冊をいただいたのも、また新しい木の香りが残っている同窓会館の一室であった。当時の世相は戦争の余燼が随所にくすぶっていて、とくに物資欠乏の峻しい時代であったが、その頃の同窓会館は謡曲のおさらい会や囲碁、将棋の会なども催されて、かなりの繁利用されていたように思ふ。

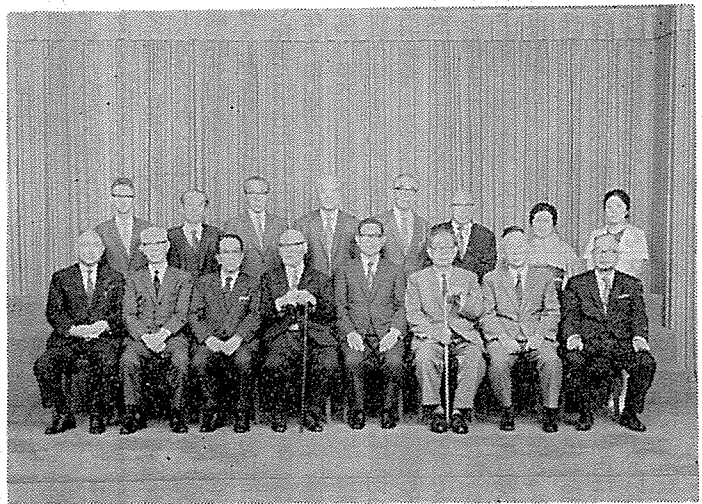
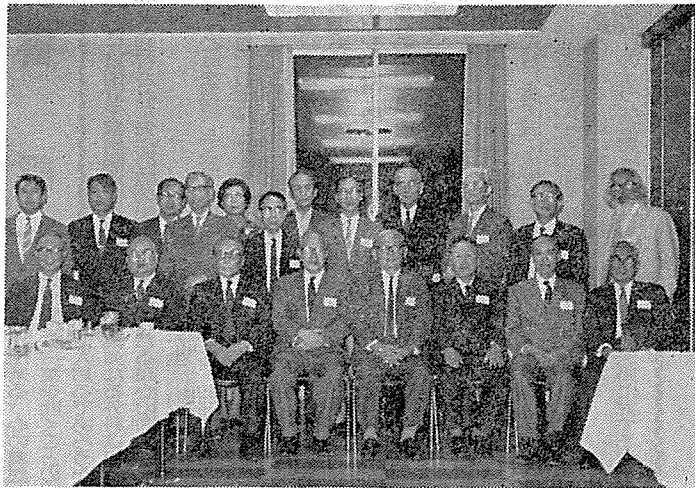
ちなみに建設当時の資料を紹介させていたと、建坪は二四〇坪、経費総額は二五万円、坪価

北村教授を迎えて 近畿支部会開かる

昭和四十六年十月十六日、北村都ホテルにおいて撮影。前列右より教授をお迎えして、大阪、奈良、T14堀丈夫、T14小田寿雄和歌山地区の同窓会を開催致しました。出席者は二十名で、一部兵庫地区会員も入っております。

北村教授に御持参して頂いた、16mmカラー映画を見ながら、千葉の今昔を語り合い、大学の近況をうかがったり、楽しい一タでありました。

写真は大正寺・スー・ションビル 石川正士 (石川正士氏寄稿)



十一年会

一九三三年千葉医専を卒業したことが出来た。殊に八十五歳とい者のクラス会が五月二十日、千葉ニューパークホテルで開催された。皆に感銘を与えた。又小林君や久崎君の芸能披露には感銘した様であった。

卒業して五十年であった。唯清談の時間の充分でなかった感みなしとしない。

出席者は前列右より、松山信六(同伴)、森住久光、木村亮太郎、御健作の恩、久崎金次(同伴)、松村泰生、前松村先生、赤木元蔵、大沢忍、山崎武治、を御迎えして、過ぎし日と今日とを語り合ひ、写真に撮られてないが小林清丸(同伴)、以上十名(鈴木記)。

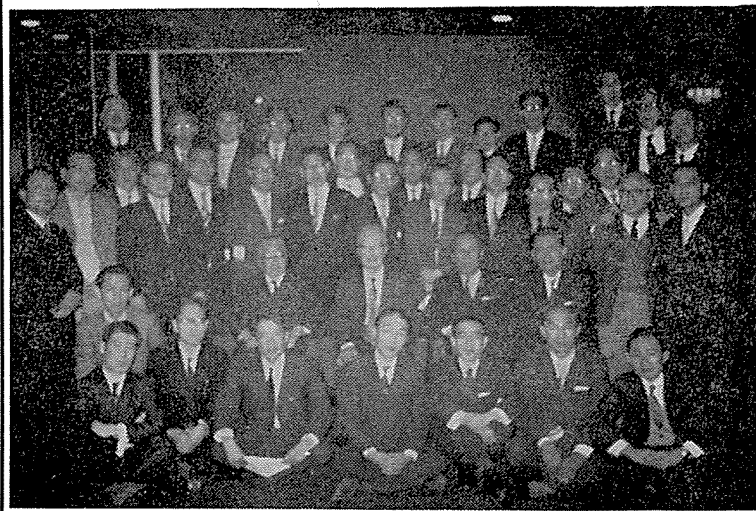
同窓会

古酒旧友

昭和26年卒クラス会

本年一月23日(日)午後、昭和26年春に卒業した者43名が千葉ニューパークホテルに集まり、赤松茂、鈴木正実、小林竜男名譽教授を囲み大変な賑やかな海辺の夕暮をすごした。この日参加できなかった者のうち23名は返信をよせており、出席率88%の高率であったことは幹事の予想をえ、これに久しぶりに名簿を完全なものにできる目算がついた。実は昨年春で卒業20年を迎えたことになると、インスタン一年を数えたと今や医師生活20年というわけで各人各様の感慨をもって集ったらしく、このところつづいていた東京でのクラス会を久しぶりに千葉に移したことも一つの意味をもった。いつも集りがよいので評判のクラス会であるが今回も高知からかけつけた友もあるほど盛況をきわめた。おいで下さった三名名譽教授それぞれに於ての講話の面影をたよせて下さった。ものまねの名手がいて、もう今はなき恩師の分をも含めて各講話の調子を再現してみせてくれた。

われわれが入学した昭和26年、千葉市は戦災のあと生々しく、駅から大学まで歩く間はほとんど焼野原であった。当時大学のバスは午前中二回しか出ていなかったと記憶する。大幸治がさかん(腕



も欠けたる者なく、今日それぞれに活躍しており、朝日賞受賞者も出ている。卒業生75名の今日の状況は、開業医40名、勤務医22名、いずれかの大学に籍を置く者9名(教授5名、助教授3名、講師1名)その他4名となっている。基礎医学あるいはそれに準ずる分野で仕事をしている者7名である。戦争直後の苦しい時代に、それでも妙に明るい団結を示しつつあったクラス一同のその後の方向を示している。酒を飲むなら古き酒、付き合いなら古き友というわけがこの日はまさにたのしかった。

(文責・村山智)

書評

「心」は国立千葉病院退官を記念して刊行された先生の隨筆集である。

先ずこれを通読して感ずる事は先生のひたむきな心が一貫して流れていることである。そのひたむきな心は、探真の心であり、師慕の心であり、友愛の心であり、ヒューマンの心である。しかもいついづれを書くときとなく自己主張に陥り、虚飾が出て来るものであるが、それが全くないと云うに凡人の及ばない心がある。

「吾人若し真に生きたいとせば志操を堅固にして一切の邪惡を排して純潔なる天職に徹するを要する」このような言葉は先生の筆から、また大学、医局に対する愛情と

から生れて始めて実感として受けとめることが出来る。心の奥底からこのような言葉を吐くことの出来る医人が何人居るであらうか、そこから「真実なる外科は極度に発揚せられたる良心の動である」という名言が生

鈴木五郎著

「心」を読んで

片倉 逸

誠意にあふれる文章が続き、そこには恩師三輪徳寛、高橋信実両先生への限りない追慕があり、学問はもろもろ人間形成に教えられることの多くを語られ、また伊東久保、瀬尾、松村、佐藤先生や

もので、真人の姿に感銘また深いものがあ

深い。そしてそこに「先憂後樂」の心境が伺える。しかも吾々が書くと恐らく毀譽褒貶の生れる箇所もあろうかと思われるがそれをみな善意に包んでいる事は暖かい先生にして始めて生れる温情である。

凡秋忌

加賀谷凡秋先生の三回忌の法要句会が六月二十九日行なわれた。

表札の人喪し萩は走の咲き

梅雨の句碑師にはとてかめ

歩をかへす 村山さとし

紫陽花の咲き師はとて笑み

み住す 中山 善夫

二千年の斯く過ぎやすすく

の花 三枝かす

埋めらるる谷に堰き立つ青

芒 上山 永光

凡秋忌夏秋の紅くはかりに

はなやかに群れる金魚と凡

秋忌 館野 之男

紫陽花の紺より藍に凡秋忌

峡中四季

砂金燦亭

春すでに空にしたがう水の色

芽吹山溪流ほそきほど光り

落葉松のその在り処より霞立つ

碧空に面映きまで雲解山

蜘蛛の目の木洩れ日風を招ひ易し

荒梅雨のすはやく曇む山の鳥

遊子に山深くなる夏霞

看取りの灯夜鷹は枝をうつたり

今朝秋や荒瀬をいつも身のほとり

露けさの火山の素顔真なる

小鳥聴くて秋風の萩かな

柿照るやタムとなる峡がらんど

冬を喰ふ日暮れの坂の膝頭

枯山に夕鶯の来て潤ふもの

三月月を吐き替へる雪霞間

極月のひかりうつろふ顔微鏡

(群馬県妻都長野原町 昭和二十八年卒)

伊東 弥恵治 共訳
鈴木 正夫

ススルタ大医典

出版について

筒井 栄

昭和四十六年四月、日本医史学

会から、ススルタ大医典第一巻が、重要な文献とされている。

発行された。本書は本学名誉教授 紀元前六〜七世紀という時代は

伊東弥恵治先生と、同じく鈴木正夫先生との著作による共訳である

ススルタ・サムヒータは紀元前六〜七世紀の古代インド医学の実

態を結集したものと伝えられ、チ

ヤラ・サムヒータと共に古代イ

約三〇〇年を隔て、ギリシャでは

従来、日本での若干の紹介はあ

た。目下、第二巻は今年の十一月

ソクラテス、ヒポクラテス、プラ

ト・アリストテレス等の碩学の

活躍となるのである。

ウェーダ医学はインド・ア

ン民族だけで行なわれたばかり

でなく、他の地方にもその優秀さ

の故に、多大なる影響を与えた事

は世界の医史学者の共に認めるこ

とである。一方では中国を経て

日本にもその一部が伝わり、古く

から実行された眼科の手術等にイ

ンド起源のものがある。又一方で

は古代のギリシャ、中世のアラビ

アを経て西洋医学の進歩に組み入

られたというのが定説である。

殊に種々の薬物がインド起源のも

のである事は論をまたない。

ススルタ大医典出版功勞賞という

前例のない賞を授賞する事になっ

た。目下、第二巻は今年の十一月

学内関係人事異動

46
•
4
•
1
2
47
•
3
•
31

科、助教授、出向（厚生省） ▽46・10・1 渡辺誠介、昇任（授） 一内科：講師）、小川道一、昇任（助教授）、出向（放医研） （二内科：講師、徳政義和、昇任（二内科：講師） ▽46・10・16 有水昇、昇任（放射線科：助教授、津金沢督雄、昇任（法医：講師、高橋英世、昇任（二外科：講師）、平島馨、昇任（二外科：講師、植村研一、昇任（脳外科：講師）、堀江武、昇任（脳外科：講師） ▽46・10・25 降矢震、昇任（中検：教授） ▽46・11・1 館野之男、昇任（	師）、辞職（杏林大 薬理、助 ▽47・1・1 有水昇（放射線科：助教授）、出向（放医研） ▽47・2・1 小林章男、昇任（中検：助教授）、吉田豊、昇任（麻酔科：助教授）、上原すす子、昇任（十大看護教諭養成所：教授） ▽47・2・16 内山曉、昇任（放射線：助教授）、川名正直、昇任（放射線：講師） ▽47・3・31 山内昭雄、辞職（岩手医大：教授、工藤逸郎、辞職（日大药学部 助教授）
---	---

[illegible]

医学部
後援会
総会開かる

去る六月三日(土)午後三時、
一〇七名の会員を記念講堂に集めて、
後援会の定期総会が開かれた。

昨今の風潮が学部長、諸教授を開
んでの各学年別懇談会は好評であ
った。新会長には、中村善之助氏
に代つて千葉保次氏が就任した。

ちなみに氏は昭和二年本学卒、

學內關係

人事異動

46 · 4 · 1 } 47 · 3 · 31

▽46・8・31	宇佐美暢久(二内科・講師)、辞職(大阪・住友病院、中野喜久男(二外科・講師)、辞職(千葉県衛生部)	放射線科・講師
▽46・9・1	遠山富也(放射線	
▽46・12・13	関隆(二内科・講	
▽46・12・1	石川清文(昭和大学・教授)、就任(衛生・農山研・教授)	
▽46・12・13	内田昭夫(昇任(農山研・教授)	

檜垣康二（吳三津田高・飯野康高）、桧川國子（手澤高）、若原
 夫（足利高）、西浦政代（星美孝真由美（桜隆高）、吉原俊雄（立
 園高）、波辺浄（福島高）、吉田川高）、加藤泰治（千葉高）、鈴
 透（土浦第一高）、三瀨忠道（新本文晴（開成高）、片桐洋子（東
 宿高）、山口邦雄（千葉高）、斉京学芸大附属高）、塚本哲也（掛
 藤博幸（木更津高）、新井貞男（川西高）、宇田毅彦（上野高）

河直之(小石川高)・齊藤正之
(三田高)・高橋修(麻布高)・原
田順和(戸山高)・織田良雄(希
望ヶ丘高)・宮城武篤(普天園
高)・山城豊(那覇高)・張守和
(インドネシア私立華英高)

昭和47年度医学部進学過程の入学試験は3月3・4日に行なわれ、左記の103名の諸君がめでたく難関を突破して合格した。

相川英男(泌尿科) 赤瀨マサ子(沖繩中央病院) 秋元敏伯(二内) 飯塚孝子(婦人科) 池松正次郎(東京医大) 石川龍雄(二外) 石崎純子(二内) 伊藤文憲(二内) 稻葉憲之(婦人科) 岩沢博司(婦人科) 上江州邦弘(沖繩中央病院) 内田邦明(耳鼻喉科) 内山宙三(岡山済生会病院) 宇津見和郎(二外) 山渚生(婦人科) 大岩孝司(肺癆) 榎本貴夫(腦外科) 大崎孝司(肺癆) 天久保和明(沖繩中央病院) 大崎隆郎(警察病院) 大塚薫(泌尿器科) 大西久仁彦(二内) 大野英一(二外) 大橋浩文(中央鐵道病院) 大和田吾夫(腦外科) 岡信男(腦外科) 奥田孝子(婦人科) 小野豐(整形外科) 河西九十三(婦人科) 加藤誠(腦外科) 菊池友	允(東京女子医大) 北浦真理(北沢次(広尾病院) 栗原正(住友病院) 玄亨(寧園) 近藤春樹(立東京第二病院) 後藤吾也(北里大学) コーエン・ア(二外) 真山和徳(小兒科) 執行一砲(武蔵療養所) 清水淳子(小兒科) 荻野勇(二外) 勝呂徹(敷形外科) 鈴木信夫(第二北学) 鈴木光二(聖心力病院) 鈴木明・相馬光弘(二外) 立塚曜子(眼科) 田中隆二(鐵道病院) 塚本創一郎(警察病院) 唐司則之(二外) 外岡正英(二内) 豊田敦(整形外科) 中島征男(東京女子医大) 中村勉(整形外科) 長尾啓一(二内) 鍋島誠也(二外) 檜川健次郎(救世軍病院) 西野哲男(二内) 西野卓(麻醉科)	北野口武英(二内) 長谷川陽子(眼科) 檜垣通(二内) 榎下由穂昭(眼科) 古屋桂香(二内) 牧野定夫(小兒科) 松川正明(二内) 松島保久(二内) 松田武美(二外) 水野毅(二内) 鍋島美子(眼科) 宮路太(小兒科) 向井稔(二外) 村上光石(二外) 村木登(二内) 村田住子(長野県医務課) 森田敏和(警察病院) 柳瀬義男(小兒科) 矢野明彦(公衆衛生) 山崎茂(二内) 山田研一(第一化学) 山森秀夫(二外) 吉田家二(二内) 葉輔治(婦人科) 力武知之(肺内科) 若山芳彦(二外) 脇坂正美(泌尿器科) 渡辺滋(二内) 喜屋武照子(戸出健彦(婦人科) 宮城三津夫(二内) 中村和郎
--	---	--

入	
☆ ☆	昭和47年度医学部 日に行なわれ、左記 突破して合格した。
大宮安紀彦（九段高） 富崎南高）・中村仁（九段高） 山口好晃（台山高）・山上岩男（ 佐野高）・小松てる代（立川高） 小松てる代（立川高） 豊多摩高）・鄭元浩（小山台 高）・岩井潤（武蔵高） 彰（小松川高）・角南兼朗（新潟 高）・竹内由美子（長野高） 村隼（教育大学附属高） 生（小石川高）・森照男（墨田川	千葉高） 池上宏（ 島学院高） 古屋好美（ 甲府南高） 伊藤公道 （長生高） 榎木茂（ 開成高） 織田成人（鶴丸高） 浦和高） 稲木一元（上野高） 萩野幸伸（ 浦和高） 得丸幸夫（浦和高） 大岡正志（ 小池洋（ 鈴木高） 別所鶴見丘高） 明宏（松本深志高） 関東六浦高） 名古良輔（浦和 高） 小沢卓夫（開成高） 田勝哉（甲府南高） 今野秀樹（木更津高） 戸山高） 原繁（熊谷高） 花園 和田倬将（ 布村正夫（金沢大学教育学部附屬 高） 遠藤和男（新潟高） 小

つた。新役員は次のとおりである。

▽会長 千葉保次　▽副会長 坂本利正（学四父兄）　▽理事（学四父兄）（学三父兄）　▽伊藤義夫　木内重信（灘岡寿）　高田忠吉　横山菊男（学三父兄）　勝田定吉　佐藤勘五郎（沢野正毅）　坪井矩一郎　嶋貝太多治（学二父兄）　岡庭福次　上田忠太郎　伊達文雄　長井剛　浜道三　松本裕吉（学一父兄）　池田寛　児嶋道弘　菅井規矩雄　高橋興一　塚本胖　松村新一　柳沢秀雄（医進二年父兄）　青柳源治　島上善五郎　鈴木ふさ　堀徳子　水谷利夫　安田啓子　吉田国男（医進一年父兄）　仲田祐三　梶岡滋美　三浦信吾　篠塚光春　小沢昭司　森澁沢　▽監事　鈴木強（学四父兄）　金子八郎（学三父兄）

昭和47年度 千葉大学医学部公開講座

午後 4.00～午後 6.00、於記念講堂

9月4日(月) 生検の細胞組織学的診断

——光学顕微鏡並びに電子顕微鏡の立場から——

9月5日(火)

内分泌の最近の動向

9月6日(水)

肝胆道疾患の現況

9月7日(木)

環境汚染と発癌

9月8日(金)

内視鏡診断の進歩

司 会

永 野 教 授

熊 谷 教 授

奥 田 教 授

吉 田 教 授

香 月 教 授

公開講座のご案内

医学部大学院教務委員会では、例年主として学内の教育と啓蒙とを主眼として公開講座を行なってきました。今年も昨年に引きつぎ夏休みの終る前の一週間、つまり九月の第一週に左記の要領で開催することになりました。それぞれのテーマについての最先端の研究者である五人の司会者によって、その内容が目下練られているところです。おそらく八月はじめには、抄録も出来る予定ですので、興味を持たれる方は教務係までお問い合わせ下さい。

第49回 千葉医学会学術大会
第18回 千葉県医師会学術大会
第11回 日医医学講座
連 合 大 会 予 告

期日 昭和47年11月11日(土)午後2時30分

1. 特別講演 題、演者、未定

2. パネルディスカッション

- 小児の救急医療 司会 中島博徳博士
 ・ 周産期の救急医療 (産科から小児科へ)
 ・ 意識障害 (急性脳症)
 ・ 呼吸困難 (特に気管支喘息)
 ・ 気道閉塞 (特に気管内異物)
 ・ 熱傷の処置
 ・ 人工呼吸の実際
 ・ 救急医療体系試案

題字について

このたび、新しい同窓会報の題字を、委員一同で現会長鈴木五郎先生にお願い申し上げたところ、切破つたので無理にも拘らず冠頭のような文字を賜りました。筆勢に感ずるものです。

お願い

新会報発行の準備が進んでいます。今秋には昭和四十七年版の新しい会報をお届けしようとして計画して居り、すでにそのための往復ハガキで返事いただいた方もかなりあります。会報は会員相互をつなぐ大きな役目をもつもので、保

同窓会報の新発足

原稿募集要項

わが同窓会の新聞や会報も時代の推移にともなうて、幾多の変遷がみられた。今の会報も昭和三十三年五月一日の改号第一号以来のものであり、本号は丁度第五十号になるわけである。

同窓会報の在り方については、今までも、いろいろの希望や批判が寄せられており、そのたびにその時代で何とか努力してきたものと思いますが、現実には、編集部の人手不足、原稿不足、その他諸般の事情もあって仲々円滑な編集発行は出来ませんでした。

このたび、第五十号を記念して会員と母校とのつながりをさらに緊密にし、また会員相互間の音信交換を掲げて親睦交流の実を挙げようと思ひ、ここに面目を一新して、ささやかながら新編集部を結成いたしました。取敢ず、学内にいる常任理事と学内支部理事が委員になりました。素人の集まりで、慣れない原稿の整理やら版組みをします。どのよう

な会報が出来上がるものか不安ですが、新しい時代に向って一つの努力をささげてみる決意です。

ここで何よりも大変なことは原稿の募集です。諸般の事情で、学生諸君の参加がありません。振って投稿をお願いいたします。どのように仕事が行進するかの判りませんが、年に六回(今まで四回)の発行を企画しています。

随想 二〇〇〜二五〇〇字
 支部便り 九〇〇〜
 クラス便り 二二〇〇字
 病院便り 必要に応じて白黒
 書評 写真一葉
 文芸欄 詩、和歌、俳句、書画(写真焼付けのもの)
 その他、人事、音信消息など

宛 先
 千葉市支那町三三三、千葉大学医学部記念講堂内、のはの同窓会編集部
 なお、原稿は毎月数日の末日までのものをまとめて、偶数月に発行する予定です。詳しい掲載時期などについては、編集部委員にお任せ下さるよう御容赦願います(文責・鍋谷)

編 集 部 委 員
 井出源四郎、伊藤健次郎、井上誠一、岩崎洋治、内山廣、岡本昭二、奥井勝二、数馬欣一、金子敏郎、北村武、○木村康、白井敏雄、辻陽雄、徳政義和、○鍋谷欣市、坂原弥四郎、○村山智(アイエ才順、○印は編集幹事)

◇ 今回の五十号記念ですので、B5版8頁にしました。しかし今後は速報性をもたせたいので、頁数は少なくなるかも知れません。

◇ 上記の予定では偶数月刊になるわけですが、七月二十二日に今年度の総会がありますので、予定を変更して編集を急ぎました。本当に間に合えば良いと思っています。

◇ 今までの選刊のために、かなり古い記事、たとえば東京のはな会の記事などは、新しいものと合せて二つ載せたりしています。

◇ 「題字について」にもありますが、本会報のレイアウトが大巾に変更しました。また内容についても学生が編集に当たったときのものとはかなり違っていると思います。ご一読いただいて、ご意見を伺えたいと思います。

あとがき

◇ 次回発行に間に合うための原稿締切は、特別に八月十日とします。奮ってご投稿下さるよう、お待ちしております。

